Doll Location Test における「枠」と空間位置について

八田 武志 [(1)]（hatta@fuksi-kagk-u.ac.jp）
築地 典絵 [(2)]・広瀬 香織 [(3)]
〔[(1)] 関西福祉科学大学・[(2)] 京都女子大学・[(3)] 四天王寺大学〕

Psychological meanings of circle frame and spatial location of symbol figure placement in the Doll Location Test

Takeshi Hatta [(1)], Norie Tsukiji [(2)], Kaori Hirose [(3)]
[(1)] Department of Health Science, Kansai University of Welfare Sciences, Japan
[(2)] Department of Education, Faculty of Human Development and Education, Kyoto Women's University, Japan
[(3)] Department of Humanities and Social Sciences, International Buddhist University, Japan

Abstract

Psychological meanings of the circle frame and spatial location in the Doll Location Test (DLT) were discussed by the placement of symbol figures. Eight psychoneuroses cases showed representations of symbol figures outside of the printed circle frame in the DLT test sheet. Results showed a consistent tendency that negatively recognized non-familial members were placed in the right upper space while negatively recognized familial members were placed in the left lower space. In the cases of representation that consisted of familial member only, the circle frame had a meaning to classify negative from positive psychological recognition whereas the circle frame was used to classify between familial and non-familial members in the cases of representation that consisted of family members and business related members. These mean that psychological meaning of the frame by the printed circle line is not static but dynamic plasticity and meaning of spatial location of the negative person depend on the clinical case characteristics.

Key words

Doll Location Test (DLT), meaning of circle frame, spatial location of negative person, family member recognition, psychological boundary

1. はじめに

シンボル配置技法の一つである Doll Location Test（以下 DLT）では人間関係を表現する際、検査用紙の中央に自分自身を表象する人形を配置し、自分を取り巻く人間を順次自由に空間配置することが求められる。検査用紙には中央の位置を示す点と半径 14 cm の円が描かれている（Figure 1）。検査を開発するときには特別な意図はなく、シンボルである人形を配置するのに無限の空間を提供すると課題として困難すぎるのではないかと考え、何かの目安にと円を描くことにした（八田，1977）。実際の検査場面でときに「この円の意味は何ですか」という質問があるが、「何かの目安にと考えて下さい、特別な意味はありません」という答しか返えさないことにしている。しかし、この円で構成する「枠」が対象者にとって、境界あるいは結界のような何らかの心理学的意味を持つであろうことは容易に想像できる。

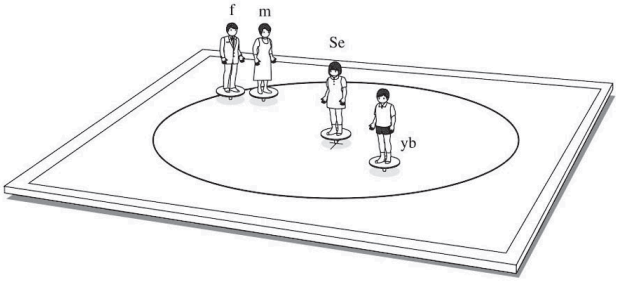

Figure 1：DLT の配置例
注：f は父親、m は母親、Se は本人、yb は弟を表す。

仏教で境界とは清浄な領域と不浄な領域との区切りであり固定的なものである。境界の内側で受戒や布薩などを行う摂僧界をはじめとして、摂衣界、摂食界などの種類がある。神道でも鎮守の森や山、川、大岩、大木などは、禁足地である場所であり、神域や常世と現世の端境を示している。また、神社・寺院などの境内や建築物では意図的に段差を設けてこれら境界を明示している。投影法的な要素を内包する DLT において、円で構成される外と内との境界あるいは「枠」にはどの様な意味が生じるのであろうか。

投影法で「枠」あるいは境界について積極的に考慮したものに、中井（1974）が考案した「枠づけ法」が挙げられる。「枠づけ法」とは、患者の前で治療者が紙の周囲に枠づけをして、それを患者に手渡して描画してもらうというものであり、「枠」が患者に与える影響としては、「枠」によって保護される面と、表出を強いる面の両価性があるとされている（皆藤，1992）。これらの場合、心理的な境界の意味が自由度を持つことはなく、固定的に解釈されることになる。

ところで、DLT で表現される人間関係の表象には広瀬が指摘するように 2 種が含まれると考えられる（広瀬，

2001)。1 つはその時現在の実際の対人関係であり、もう 1 つはその個人の内的表象の投影としての対人関係である。DLT は実際の対人関係の表現でありながら、その人が過去に経験してきた対人関係の投影としての表現も含まれており、それには実在しない人物や実際には存在しない人間関係等、その個人のファンタジーが表現されることもある。このような DLT での人間関係構造の表象の特徴を踏まえたときに、検査用紙に印刷された円の枠外と内を対象者はどのように認識するのであろうか。

DLT に関して先行研究において配置されたシンボルの空間位置の分析からは、次のことが明らかにされている(Hatta, 2004)。この研究では、健常な大学生 283 人を対象に、架空の短文から 8 名（信頼でき親近感のある父と母、信頼できず親近感のない父と母、信頼でき親近感のある家族以外の年長者と年少者、信頼できず親近感のない家族以外の年長者と年少者）の人間を配置させ、その空間位置についての特徴を分析している。その結果からは、①信頼できる親近感のある人間の表象はそうでない人間の表象よりも 2 倍以上近い物理的な距離に配置されること、②空間を前方 90°、下方 90°、左 90°、右 90° に 4 分割した分析では統計学的に顕著な傾向は見出せなかったとしている。ただ、改めて左 90° と右 90° の 2 群で改めて比較すると、信頼でき親近感のある人間の表象は 368 対 213 と左空間への配置件数が多く、逆に信頼できず親近感のない人間の表象は 365 対 209 と右空間への配置件数が多くなっている。このことから親近性の低い negative な評価が与えられる対象は右空間に配置され、親近性の高い positive な評価を与えられる対象は左空間に配置される傾向がうかがえる。ただ、このような結果は架空の人物特徴に対して健常大学生が表現した結果に基づいたもので、現実の自分を取り巻く positive な評価をする人物や negative な評価をする人物に対しての表現から導かれたものではないという限定を置かざるを得ない。実際に negative な評価をする人物や positive な評価をする人物をどう配置するのかは、異質なものとなるかも知れないという指摘には対応しがたい。したがって、実際の検査結果にも続く確認作業が行われることには、意味があると言えよう。とくに臨床場面では人間関係構造において negative に評価をする人物との関係（確執、敵意、攻撃欲求、排除欲求など）が、対象者の適応障害において重要であることを踏まえて、negative な評価をする人物の表現に焦点を当てて考えることにする。

ところで、これまでに実施されてきた DLT の結果は、大多数の場合には negative な評価をする人物のシンボルでも円枠内に配置される。しかし、ときには対象者にとっては極めて重要な人間関係構造上の人物でありながら、検査用紙上に配置したくない、どうしてもできないとこだわり、配置されない人物を口頭で指摘することがある。つまり、円枠と検査用紙枠の 2 つの枠からもはみ出るわけである。それ以外にも、少数ではあるが検査用紙上には配置されるがその位置は円枠外である事例がある。つまり、円枠を印刷された用紙上ではあるが円の中ではない位置に人形を配置する事例である。

本稿は円枠の外にシンボルを配置した実際の事例を精査し、円枠内に配置される人間の表象と円枠外に配置される人間表象にどのような特徴があるのかを検討することで、人間関係の構造認知における心理学的な境界あるいは「枠」の意味と配置される人物の特徴を探ることを目的とした。

先行研究を踏まえ DLT における円枠外の表象配置について考えると DLT で表現される人間関係が、その時現在の実際のものにしろ、過去経験による対人関係の投影としての表象やファンタジーなどが含まれるにしろ、次のような仮説を設けることが可能となろう。

- 仮説 1
  円枠外に配置される表象は、自らの人間関係認知において欠くことができない重要度を有するが、negative な評価をする人間である。なぜなら、円枠外に配置することは自分を取り巻く人間関係構造の空間の枠外（ある意味での自分を内包する宇宙）、言わば別空間の極めて距離が大に配置されると考えられるためである。DLT では本人を表象する中央の人形からの物理的距離が親近性と反比例すると考える。すなわち、距離が近いと親近性が大で遠いと小であると解釈する。円の中央からの距離は比例尺度的であることを前提にしているが、円枠の線を越えると中央からの物理的距離と親近性は 1 次関数的比例尺度とは考えにくく、例えば指数関数的な別な尺度が想定でき、円枠外には自分にとって極めて negative な人物が配置されるであろう。
- 仮説 2
  円枠外に配置されるシンボル表象は negative に評価される人間であるため、右空間に配置される。これは、Hatta（2004）の結果を踏まえてのことである。

以上の仮説の検討が本稿の目的であり、それは 1974 年～ 1975 年の間に N 神経心理科外来を受診しインテークの一貫として第一著者が DLT を実施した中から、円外に人物を配置した 8 事例の結果をもとに行う。ちなみにこの間に実施し残存している資料は、神経症および精神分裂病と診断された対象者の 51 例であった。43 例の資料には円外に人物を配置することはなかったことになる。

2. 方法

N 神経心理科外来では、心理検査を要するあるいは心理療法での対応が望ましいと医師が判断した場合に、インテークの一貫として DLT を実施した。実施の方法は八田（2001）に記載がある方法と基本的に同じであり、現実場面での表現を求めたものである。検査者は、対象者と性別が同じミニチュア人形を「これは、あなたです」と言って、中心点に刺す。このとき人形は、検査者を向く方向とした。「あなたを取り巻く人間には、現在どのような人がいますか。順番に言って下さい」と指示した。対象者の発言に基づいて、性別が同じになるように配慮して、人形を手渡し、検査盤に刺すように求めた。対象者が表現したいとする人間を言い、「もう誰も置きたい人

はいませんか」と確認したのち、人形を一つずつ外しながら、検査用紙に印されたピンの跡と表現した人間を確認した。すべての人形を取り外す際には、中心からの距離（mm 単位）、方向、人物を検査用紙上に記録した。

3. 結果

事例はプライバシー保護の観点から趣旨を損ねないよう配慮しつつ若干の変更を加えている。分析対象とした資料は DLT を開発した頃の資料であり、現在のような統一的プロトコールにもとづく資料でないことを承知した上で、事例の紹介を行う。さらに、これまでの DLT 検査での実績にもとづいて指摘できる、配置された人間の表象との物理的距離の意味（物理的距離が近い方が親近性が高い）、人間表象の方向の意味を踏まえつつ（positive な関係は同一方向か自分に向かう方向となるよう配置される）、簡単な解釈を行う（八田，2001）。

3.1 事例 1：Y. Y.（26 歳、男子）

10 年前から、年に 1、2 度のてんかん発作の既往歴がある。母親がうつ病で入退院を繰り返している。自分もうつ病に罹らないかと不安で来院した。神経症との医師による診断。職場の人間関係はゴタゴタしている。上司や支店長から叱責されることが多く気分がうっとうしい。「気分がまとまらない」、「うっとうしい」、「入院せねばならないか不安」、「成績が上がらない」などの社内でのストレスを話す。「家庭で子どもにまであたりそうになる」とストレスコーピングの不調を訴える。専務である義兄から会社内での対立の非を責められた。

事例 1 の DLT 結果の特徴：家族メンバーと会社関係の多数の人間が表象されている。妻が右空間で距離が近いこと、息子と娘は左空間の近い位置に配置しており、かつ本人と同一方向を向いて配置されているので、家庭内での問題は少ないことが推察できる。自分を援護してくれる 2 名の部下⑤、⑥を近くに配置したことを除いて 3 名の部下は距離を置いて右上空間に配置されている。前者は自分を援護してくれるとコメントしている。親近性は高いと考えられる。義兄は 3 名が比較的近い位置に同一方向で配置されている。専務である義兄は左上空間他の 2 名の義兄は右上空間である（病気のことを心配してくれるや自分で会社をやっているので辞表を出したら世話になりたいとの発言が記録されている）。支店長と支店長代理は円外に配置され、negative な関係が推察できる。支店長は器ではないとのコメントが付記されている。

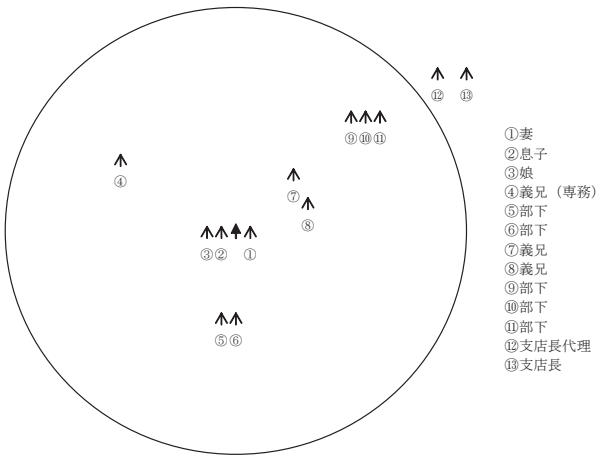

Figure 2：事例 1 ／ Y. Y. さんの DLT 配置図

3.2 事例 2：T. Y.（34 歳、男子）

不安神経症と診断された。半年ぐらい前から胃腸の具合が悪い。気分がめいる。イライラする。食欲はない。睡眠は問題ない。来月末に結婚予定である。半年ぐらい前に知り合った人である。仕事から逃げ出したい。以前に胃を悪くして 2 ヶ月ほど入院歴がある。父が直腸ガンで最近手術した。母親は胃がんで亡くなっている。自分は胃がんではないかと心配である。

事例 2 の DLT 結果の特徴：左空間の距離が相対的に近い位置に自分を向く方向で婚約者が配置され、positive な関係認知と親近性の高さがうかがえる。自分の背後と左空間に次の距離が近い同居の母親と弟が配置され、positive な関係認知と相応の親近性の高さが推察できる。別居している長兄⑥は距離を置いて右下空間に配置されているが本人への方向性が見られるので、positive な関係認知はあるが親近性はそれほど高くはない。上司である課長と部長は前方空間に本人を向いて配置されているのは、上下関係の認識が反映され見られている意識の投影が伺える。円枠外に配置されたのは同居の父と別居の次兄⑤で、方向性と距離からは positive な関係認知はあるが、親近性は低いことが推察できる。父との関係は敵対的ではないが、自分を取り巻く現状認識には入らないのはガンによる手術を受けたことでアクティブな人間関係構造から除外されてしまったのかも知れない。

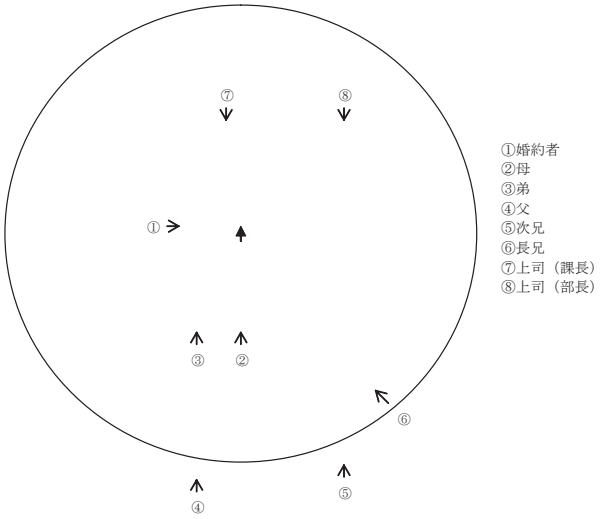

Figure 3：事例 2 ／ T. Y. さんの DLT 配置図

3.3 事例 3：Y. Y.（28 歳、男子）

社内での人間関係のトラブルによる不満を聞いて欲し

いと言うのが主訴。東京への転勤が決まった。上手くやっていけるか心配である。部下 A は一緒に東京へ行くことになっている。同僚は自分のグループとしてはそれほど強硬でなかったので得をした。上司（義兄）は自分とのつながりをみんなが暗黙の内に認めているので内に入れておく。転勤が決まり、妻との関係が悪い。

事例 3 の DLT 結果の特徴：配置さているのは家族メンバー 3 名と会社関係の 5 名である。家族メンバーは妻と 2 人の娘で物理的距離も近く、人形は本人と同一方向を向いている。ただ、妻との関係は良くないとコメントしていることを反映してか、右空間に配置されている。これからは家族関係に特段の問題を抱えてはいないことが推論できる。自分の妻の父母などを表現せず、会社関係の人間を多く配置したことは、自分の現在抱える問題は仕事関係であることは容易に推察できる。自分の左下空間近くに 1 名の部下 A を配置し、それ以外の会社関係の人間は右上空間の距離を置いた位置に配置していることから部下 A とは positive な関係と親近性の高さがうかがえるが、上司である義兄は右空間の距離を離した位置にもう一名の同僚と共に配置され、親近性は高く認知していないことが推量できる。支店長他 2 名は円枠外に配置され右上空間である。仕事上のトラブルが本人の心的な問題の核にあることが分かる。

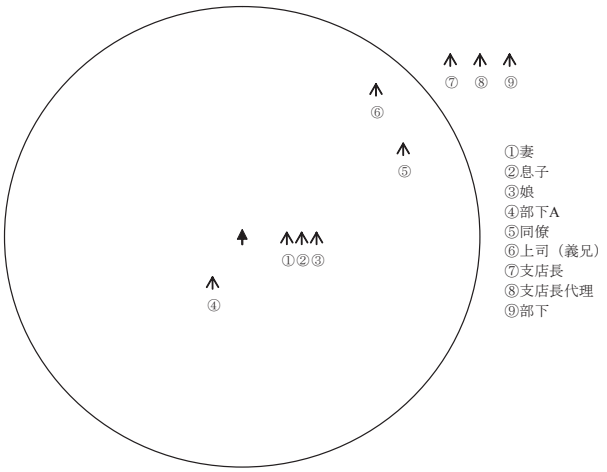

Figure 4：事例 3 ／ Y. Y. さんの DLT 配置図

3.4 事例 4：S. S.（31 歳、女子）

緊張しすぎるので辛い。心やすい人と話すのはよいが、好きな人や自分を査定する様な人には緊張して何もできない。身がすくんでしまう。家族から良く精神病と言われる。結婚したい。恥をかくのが怖いなど子どもっぽい印象で次々としゃべり、話は収束しない。

事例 4 の DLT 結果の特徴：左空間のもっとも近い位置に配置されたのは母親で、つづいて 2 人の弟が自分と同一方向を向けて配置されている。弟は自分に対して優しいとコメントしており、positive な関係と親近性の高さがうかがえる。左空間に弟ほどではないが同様に近い位置

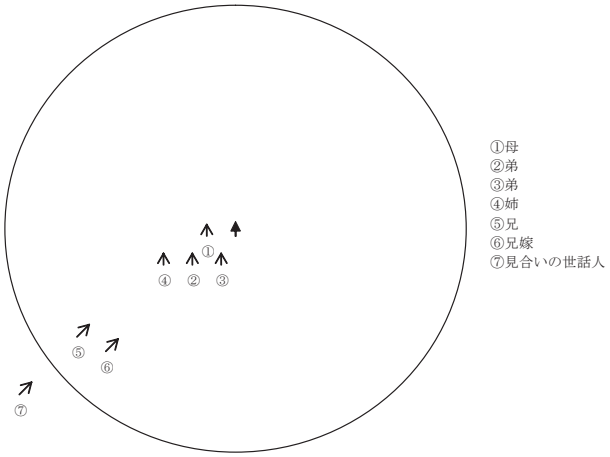

Figure 5：事例 4 ／ S. S. さんの DLT 配置図

に同一方向を向けて配置されたのは自分に対して少し冷たいとコメントしている実姉である。左空間の少し離れた位置に兄夫婦を配置している。兄は大切な人だが自分や母に対しては良くしてくれないと涙を流したというメモがある。しかし、自分に対する方向にシンボルは配置されており、兄夫婦に対して positive な関係認知であることがうかがえる。左下空間の円枠外に配置されたのはお見合い相手を世話してくれた人であり、家族メンバーではない。

3.5 事例 5：N. J.（39 歳、女子）

1 年半ほど前から主人が不能になってから悩んで 10 kg 痩せた。近くに住む夫の両親は前々から私のことを良く思っていない。家風に合わないと言われている。痩せたから主人が興味を見せなくなったと言って、両親は無理矢理新興の民間療法を受けさせようとするので断ると、離婚だと言う。嫌でたまらない。以前は有閑マダム的に外出できていたがこの頃は治療だけしか外出が許されない。離婚させると言われている。この頃は何事にも自信がなくなり、そんな自分が情けない。主人の兄弟も子ども（息子と娘）も両親と同様に私のことを良く思っていない。主人の両親や兄弟はみんな近所に住んでいる。何度も同じことをヒステリックに繰り返す。話は一方的で聞こうとはしない。神経症と診断されている。

事例 5 の DLT 結果の特徴：空間を全面的に使って多彩な人間関係を表現していることに特徴がある。自分にもっとも近い位置に配置されたのは同居していない実家の父で、自分を向く方向での配置である。続いて距離として近いのは実家の母であるが自分に向けて配置されてはいない。母よりもむしろ父との positive な関係と親近性の高さがうかがえる。自分の弟や 2 人の妹は自分に視線を向けて両親よりも遠い位置に配置されていることは、兄弟には positive な認知と相応の親近性を持つことがうかがえる。自分の夫①は自分の背後から自分に向けたシンボルの配置をしており、positive な認知と自分の兄弟ほどではないが相応の親近性を持つことが推察できる。自分の息

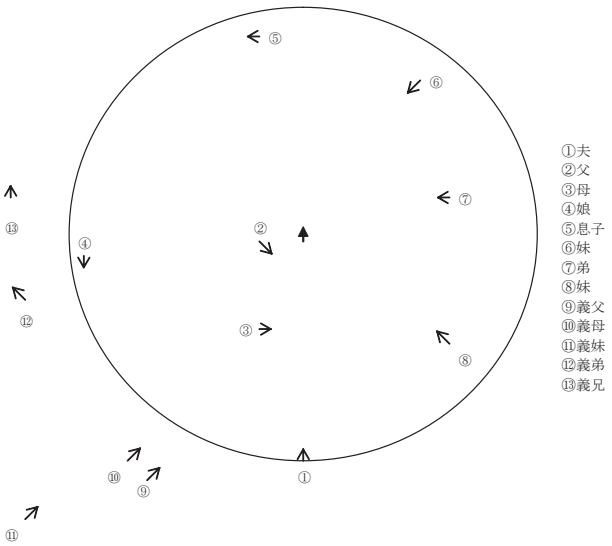

Figure 6：事例 5 ／ N. J. さんの DLT 配置図

子と娘は左空間にそれぞれ異なる方向性を示して配置されている。息子や娘はおそらく思春期であり自分自身も親近性や positive な認知ができていないと考えられる。円枠外に配置された人物は 4 名であり、左空間に配置され、義理の父母は自分に向けた視線となるように配置してあるが、義理の兄弟は無関係さを表象するような人形の配置方向である。

3.6 事例 6：N. M.（23 歳、女子）

銀行員。2 ヶ月に 1 回くらいの割合で胸を押しつけられるような夢ともわからない苦しい感じになる。印象がはっきりしているので夢ではないと思う。海の底に沈むような思いのとき耳にぶくぶくと音が聞こえる。男の人に襲われる夢をよく見る。妹と同居で下宿している。神経症の診断。

事例 6 の DLT 結果の特徴：本人の右側の近い位置の隣に母親（別居）が配置され、左側に近い位置には女友達、次いで妹、父親が配置されている。右斜め上の空間でかなり離れた位置に友人（男性）を配置している。DLT では本人からの物理的距離は親近性と反比例すると解釈されるので、同居している妹よりも同性の友人が近い位置に配置されたことはこの同性の友人は仲の良いことが伺える。一方で友人と表現しているが右空間に距離を離して配置した男性は、それほど親密な関係ではないことが推察できる。円枠外に配置した人間は課長である。この課長がどのような人物かについての特別な陳述は残されていないが、本人と同一方向を向けて配置あれたことは、職務上はその役割に指導性を感じていることが考えられる。また、左下空間の最端部に夢の中に出る暴漢という架空の人間を配置している。

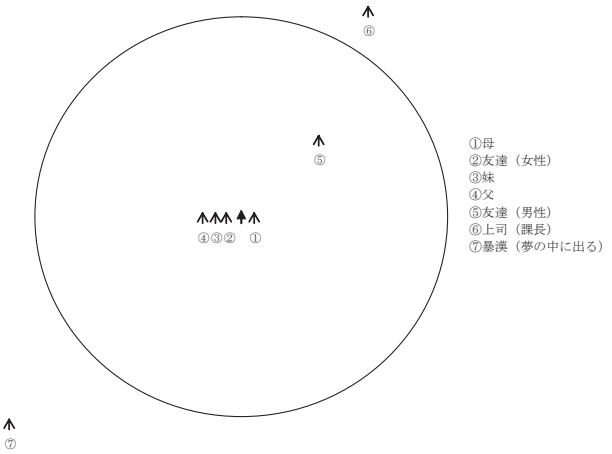

Figure 7：事例 6 ／ N. M. さんの DLT 配置図

3.7 事例 7：T. T.（19 歳、女子）

会社員。強い疲労感を訴える。身体がふらっとすることが多い。血液が全部下ってしまうような感じである。会社ではずっと気を遣っている．自宅でも同様に気を遣っている。父の再婚相手と同居している。

事例 7 の DLT 結果の特徴：同居している夫は本人の背後最短距離に配置され、自分と同一の方向を向けて配置され、左横の最短距離に母親が配置されている。同居の実父（離婚して同居）は左後方で自分と同一の方向を向けて配置され、勤め先の店長と同性の友人は距離的には近い位置ではあるが自分とは同一の方向を向けては配置されていない。これらは、自分と親近感があり、positive な関係にある人物は同一方向、そうではない人物は必ずしも positive な関係にあるとは認知していないことが推察できる。円枠外に配置したのは実父の再婚相手（同居している義母にあたる人物）で自分へ向けてとは反対の方向を向けて配置されている。実父については親近性も高く positive な関係と認知しているが父の再婚相手は negative な関係であると認知していることが推察できる。

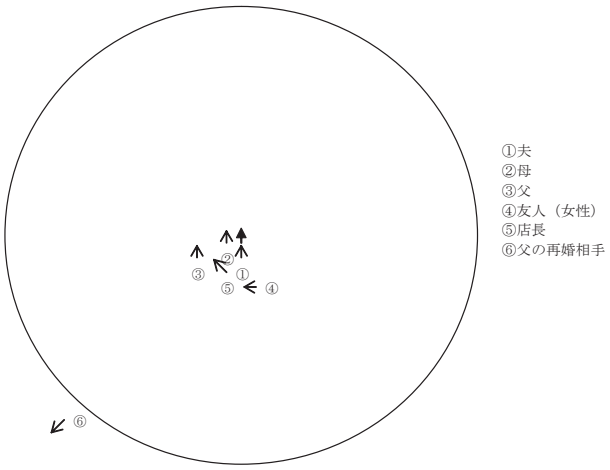

Figure 8：事例 7 ／ T. T. さんの DLT 配置図

3.8 事例 8：K. Y.（24 歳、男子）

両親は別居中。母親と同居（本人談）。最近対人関係に疲れ切って、2 週間前から会社は休んでいる（母親談）。一人で不安がっている 。人の言うことは聞かない。新聞

に自分のことが書かれているとか、友人をスパイにしてしまう。自分一人で責任をかぶらされている感じであると言う。会社の人が自分に恥をかかせようとしていると被害者意識を話す。話にくそうであるが、長時間に渡り話し続ける。但し内容は抽象的で意味が分からない。ロールシャッハの所見でも分裂症（当時）の疑いの記載がある。

事例 8 の DLT 結果の特徴：円枠内には誰も配置されなかった。同僚、友人、上司など関係がある人はいるが円の中には入れないと特別に言明していることが記録されている。円枠外に配置されたのは父親と母親で、左下枠外に配置されている。人形の視線の方向は自分に対して向けられており、positive な関係と認知していることが推察できるが、親近性を強く感じてはいないことがうかがえる。

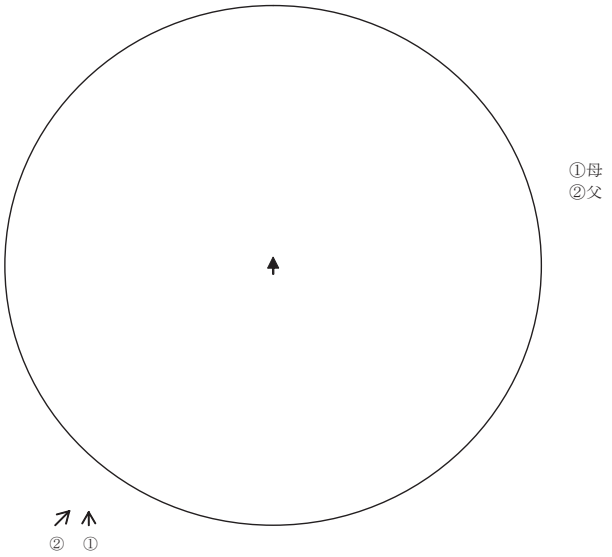

Figure 9：事例 8 ／ K. Y. さんの DLT 配置図

4. 考察

本稿は書架を整理中に偶然に見つけた 1974 年 7 月から 1975 年 8 月の期間に実施した 41 事例の DLT 結果のファイルを基に分析を加えたものである。筆頭著者が発表した DLT に関する最初の論文は、1977 年刊の「Doll Location Test に関する研究―精神神経症患者への適用例について（八田，1977）」と記憶している。失念していたが、それ以前から資料の収集を行っていたことになる。結果の資料は A3 サイズに印刷された記録用紙で、現在のものと同一である。

今日と異なり、事例の公刊物への記載に倫理上の配慮が厳格に言われることなかったので、一部表現を工夫することで、資料を使用することとした。シンボル配置技法の研究分野に幾ばくかの学問的貢献ができるのではと考えたためである。もっとも、37 年以上も以前のことであるために対象者の了解を取る手立てがないことや法律の世界では制定以前に遡って罪が云々されることはないので、了承される範囲の行為であると考えている。

さて。本稿で取り上げた 8 つの事例は 1 例を除いて神経症と診断されたものである。1 例（事例 8）は統合失調症（当時は精神分裂病）と診断されている。事例 8 は被害妄想を有している。

さて、Figure 2 ～ 9 に示した 8 事例の結果に共通するシンボル配置の人間関係特性と空間位置に何か共通性が見いだせるであろうか。

4.1 人物の空間配置について

箱庭療法の第一人者である河合（1969）は著書の中で、箱庭の空間配置の分析に触れ、「われわれのいままでの経験では、左側はその人の内界世界、無意識界を、右側は外的世界、意識界を占めることが多かった」と述べている。また、空間象徴としての四分割を考えてみると、グリュンワルド（Grünwald）によれば、左上が神聖な場、左下が源泉、右下が家、右上が社会となる（仲，2006）。空間図式では、右上空間は「生への能動性の領域」とされている。高橋・高橋（1986）は外国の空間象徴をそのまま我が国に適用することへの疑問を呈しながら、臨床経験に基づき右上空間を「目標・計画・完成・科学・数学」と関連づけている。

このような空間配置の解釈を参考にすれば、事例 1、事例 2、事例 3、事例 6 が来談時仕事を有しており、その仕事上の関係者が右上空間に配置されたことは、非常に興味深い。仕事上の関係者は、対象者にとってまさに「社会」であり、外的世界と認知され、意識化される人物であると考えられる。彼らが現実検討能力を備え、抱える問題や課題に直面するだけの自我を持ち合わせているとの見立てができるのではないだろうか。

また、事例 8 は左下の枠外に父母の人形のみを配置しているが、「不安、退行、依存、幼児期への固着」といった空間解釈と重ね合わせると、事例 8 の対象者の現実検討能力の危うさが現れていると指摘できよう。また事例 4 の DLT 表現では、すべての人形が左下空間に配置されている。治療者がこの対象者に対し「子どもっぽい」という印象を受け、話のまとまりが無く収束しない様子などから、対象者の表現した人間関係は内的世界の認知を反映したものと考えられる。

4.2 枠と対象の特徴

枠を有する心理検査には、風景構成法、ワルテッグテスト、星波テスト、箱庭療法（正確には心理療法）などが上げられる。風景構成法、ワルテッグテスト、星波テストは白い検査用紙の中に長方形の枠が描かれ、対象者はその枠の中に求められるものを記入していく。これらの検査には、検査の枠と用紙の枠の 2 つの枠が存在することとなる。箱庭療法は箱庭の木枠のみが対象者が内面を表現する枠となるので、先の検査とは枠のとらえ方が異なると言えよう。それでは DLT の場合はどうであろうか。DLT には Figure 10 に示すように円形枠、用紙枠、さらに用紙を置く木製の検査盤（長方形）の 3 つの枠が存在することとなる。

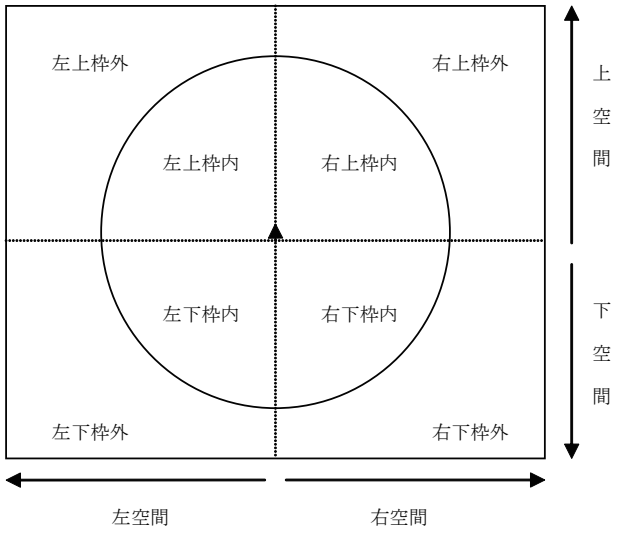

Figure 10：DLT の空間配置

河合（1969）は箱庭の枠外への玩具の配置について「箱の外に置かれたものは、その存在をうすうす感じながらも、自分によって容認しがたい心的内容を表している場合が多い」と述べている。また、楠本（2011）は箱庭作成過程の内省報告の研究から、箱庭の製作者にとって嫌なものは「意識されており、やはり現在のところ枠内には置かない、置けないもの」であると述べている。製作者が嫌だと感じるものは内的イメージとして枠外にあるために、箱庭内には置かずにすんでいると考えることができるとまとめている。それでは、DLT の円枠の外に配置された人形はどのように解釈すればよいのだろうか。

全例に共通する第 1 の特徴は、自分との関係を negative と認知する人物は円枠外に配置されていることである。心的トラブルが仕事上の事柄に起因する事例（事例 1、2、3、6、7）では、円枠内に家族と positive な関係認知をする人物は配置されるが、円枠外には negative な認知をする対象が配置されている。問題が仕事上のトラブルに起因しない事例では、家族と家族以外のメンバーを配置する場合に事例 4 では境界を家族とそれ以外という認識で表現している。すなわち、枠外に置かれた人物は概ね「容認しがたい」「遠ざけたい」人物である。その中でも事例 1、事例 3、事例 6 が枠外に置いた人形はすべて仕事関係者（上司として嫌、叱責されるから嫌）であり、これら 6 体の人形はすべて右上枠外に配置されている。事例 5、事例 7 もそれぞれ自分にとって受け入れがたい家族を枠外に配置しているが、それらの人形はすべて左下枠外に配置しているのである。事例 4、事例 6 も左下枠外に「見合いの世話人」「夢の中に出てくる暴漢」といった実態のあいまいな人物を配置している。事例数に乏しく断言は避けねばならないが、どの位置の枠外に人形が配置されたのかということと、対象者の人物の認知には関連があると思われる。これまでの考察とも関連して、右上枠外に配置された人物よりも左下枠外に配置された人物の方がより対象者の無意識に関わっており、治療過程で取り扱いに注意を要すると考えられる。

以上をまとめると、円の内外を隔てる「枠」は、DLT で表現される登場人物が家族を基本とする場合には家族メンバーと他人を区別するのに用いられるが、家族も仕事上の関係する自分を取り巻く人間を登場人物にしている場合には negative な認知をするか positive な認知をするかで区別するために用いていると言える。すなわち、DLT での円が持つ役割は心的な境界を表現する際に自由度を持っていることが分かる。円という「枠」は家族と他者を区別する場合もあるが親近性（あるいは嫌悪性）を表現する場合にも用いられるのであり、自由度、可塑性を含んでいることが分かる。枠づけ法の「枠」や箱庭療法などでの境界（例えば、意識と無意識）のように固定的ではない。この点で DLT は投影法としての自由度の高さを特徴とし、これが実施の際に心理的抵抗が少ないとされることの理由かも知れない。

4.3 配置空間とメンバー特性

第 2 の共通性は、配置空間とシンボルで表象されたメンバー特性に関する点である。8 つの事例を分析すると、配置された家族人形（配偶者や婚約者、義理の家族を含む）をすべて数えると 43 体であり、そのうちの 28 体が左空間に配置されていた（左下 16 体、左上 5 体、自分を表す人形と水平に配置が 7 体）。この結果をふまえると、家族メンバーは左空間に配置されることが多く、特に左下空間への配置が顕著であると言えよう。すなわち、家族メンバーのみを表現した事例 5、事例 8 を除く 6 事例で、円枠外の右上空間に配置された人物はいずれも家族メンバーでない（事例 4 において、唯一見合いを紹介してくれた知人が左下枠外に配置されたが、見合い相手を紹介するという行為は疑似家族的な行為であると考えれば）。会社の上司という共通性を 3 例（事例 1、3、6）に見ることができる。それに対して左下空間の円枠外に配置されたのは、父の再婚相手、父と母、嫁ぎ先の父母や兄弟などの家族（姻戚）関係メンバーが多い。家族メンバー以外では、ファンタジーの暴漢と見合いの世話人がその他の左下枠外に配置された人物ということになる。これらから、negative な関係と認知をする仕事関係の表象は右空間に配置されると指摘できよう。一方で、事例 5 では義兄や義父母が 4 名とも円枠外の左下空間に配置されたり、事例 2、7、8 では父母や父の再婚相手など大半が円外の左下枠外に配置されている。円という心的境界があり、円枠内には配置しないという negative な関係構造の投影を考えると、心的境界である円枠外に配置される人物はそれが家族（姻戚）関係メンバーかそうでないかで表現される空間が異なることを意味している。

まとめると、DLT では円の枠外には negative な関係認知をする人物が配置されること、ただし、家族（姻戚）メンバーに対しての negative な認知か他人に対する認知かで表現される空間位置が異なること、心的境界を表す円枠内外の表象は登場する人物群の特性で可塑性を有していることと指摘できよう。

これらの結果は仮説 1 にあげた「対象者にとって negative と評価する人物は円枠外に配置される。円枠外に配置される人物は本人にとっての negative 度は円内に配置された人物よりも大きい」、は仮説通りであったと言えよう。第 2 の仮説は「negative な人物は円枠外の右上枠外に配置される」は支持されなかった。円枠外の右上枠外に位置される negative 評価人物は家族と仕事上の人間が表現される場合に於いてのみ妥当であるが、表現される人間関係が家族に限定される場合には円枠外の左下に配置されたためである。これらの結果は人間関係構造の心的表象における円による心的境界は必ずしも固定的ではないことを意味し、このことは DLT での人間関係構造認知の投影表現での特徴と考えられよう。

最後に DLT は基本的に投影法に分類できるものであるので、中井（1974）の「枠づけ法」との関係で考察しておこう。「枠」によって表現されるものとして、中井（1974）は「内面的、隠された欲求や志向、攻撃性、幻想、内実」を挙げており、森谷（1983）は、バウム・テストに「枠づけ法」を援用した実証的研究において、枠づけ空間が自己と他者や環境との精神的葛藤の表現を促進する作用を持つことを見出している。また森谷は、枠づけした用紙にさらに円形の枠を記入したバウム・テストも試みているが、その描画の特徴として、バウムは円内に描かれることが多く、何らかの形で被護された木が多くなることを挙げ、外枠＋円枠用紙では内面的表現よりも健康的な表現を促すことを示唆している。

上記の知見をまとめると、「枠」はネガティブな内面性の表出を促進する一方で、DLT 検査でのように外枠＋円枠の二重枠になると、円枠内への健康的な表現が促進されると言えるかも知れない。本稿で問題としている枠の「外」の意味合いについては、「枠づけ法」の構造上枠外への描画が出来ないこともあり特に言及されていない。また森谷（1983）も、枠外の描画については円枠外に描画が「はみ出る」ケースが少数存在することは示されているものの、その意味合いについては特に言及していない。

しかしながら、これらの知見を統合的に考えると、本稿で取り上げた事例はいずれも DLT の円枠内に表現される人間関係は心を重度に病む「病的」なものではなく「健康的な」側面を示し、円枠と外枠（検査用紙）の間に表現される人間関係は、やや深刻なネガティブな感情にまつわる人間関係であると考えられる。

本稿で使用した DLT の結果に基づく分析は 1970 年代の家族や職場での人間関係の投影であることに一定の考慮が必要なことを付記しておかねばならない。人間関係構造認知は時代や地域の特徴を内包するからで、事例 5 にその特徴が見出せる。すなわち、今日のわが国では一部のわずかの地方を除いて、いわゆる「家」概念は希薄となっており、家風というような単語はほぼ死語と言える。江戸幕府の封建制度の基盤をなす理論として朱子学が採用されたことにより、戦後の日本人であっても儒教の影響を強く受けている。孔子の「孝」の概念を具現化する「家」概念はその個別の規範を家風として育ててきた。「家」概念は会社組織にも適応され、会社は家と表象され、三菱などの財閥系は言うに及ばず、「松下電器」、「ソニー」のような戦後出現した企業でも該当した。それが戦後 30 年でも対象者の DLT 表現に残存していたことは反映されていることは留意せねばならない。このような「家」概念のような儒教的意識が、今日では希薄あるいは消滅に近い状況にあると推察すると、negative に人間関係を認知している家族メンバーは左空間、それ以外は右空間にという結論は、現代での negative に人間関係を認知する際の表現との比較検討の後にまで先送りし、今後の検討課題であると指摘するに留めるのが適切かも知れない。

参考文献

皆藤章（1992）．風景構成法　氏原寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕共編．心理臨床大事典．培風館，558-560.

河合隼雄（1969）．理論篇．河合（編）．箱庭療法入門．誠信書房，3-51.

楠本和彦（2011）．箱庭制作過程および説明過程に関する質的研究の試み. 佛教大学大学院紀要, 教育学研究科篇, 39，103-120.

八田武志（1977）．Doll Location Test に関する研究（1）．適性研究，10，1-6.

八田武志（2001）．シンボル配置技法の理論的背景．八田（編）. シンボル配置技法の理論と実際. ナカニシヤ出版，1-18.

Hatta, T. (2004). Implications of the symbol figure representations: Information from the direction and spatial location used by Japanese students. *Perceptual and Motor Skills*, 90, 180-186.

広瀬香織（2001）．精神科臨床における Doll Location Test の適用．八田（編）．シンボル配置技法の理論と実際．ナカニシヤ出版，47-58.

仲律子（2006）．「四分割統合法」の導入について ― 小学校 3 年生女児の不登校のケースから ―．心理臨床学研究，23，705-715.

中井久夫（1974）．枠づけ法覚え書．芸術療法，5，15-19.

森谷寛之（1983）．枠づけ効果に関する実験的研究―バウム・テストを利用して―．教育心理学研究，31（1），53-58.

高橋雅春・高橋依子（1986）．樹木画テスト．文教書院.

（受稿：2011 年 7 月 30 日　受理：2011 年 9 月 20 日）